資料No.5

平成21年８月28日
水稲の作柄に関する委員会

水稲の作柄に関する委員会（平成21年産第２回）の意見

１　８月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

(1)　７月下旬以降、気温は関東以西の太平洋側を除き平年よりやや低く、日照時間は７月ほど著しくはないが、北海道の一部などを除きおおむね全国的に少なくなっている。

今後の天候の見通しでは全国的に、気温は平年並みないし高く推移し、日照時間は、おおむね平年並みに推移すると予想されている。

(2)　本年の水稲は、寡照による軟弱徒長気味な生育に加え、出穂期前後の低温・日照不足によるもみ数や稔実への影響が懸念される。

一方、上記のような気象予報からすると、今後の粒の肥大・充実はおおむね平年並みに推移すると見込まれる。

２　次期の調査に当たって留意すべき事項

(1)　７月の日照不足等により生育が遅延している地域においては、品種・地域別の出穂遅延程度ともみ数を正確に把握する必要がある。

(2)　出穂期前後に低温・日照不足となった地域においては、登熟や品質への影響を見極める必要がある。

特に、北海道及び東北北部の一部で不稔の発生が懸念される地域においては、その発生程度を正確に把握する必要がある。

(3)　稲体が軟弱徒長傾向のため、倒伏、いもち病及びカメムシ等の発生状況に留意する必要がある。

(4)　台風及び集中豪雨による作柄への影響に留意する必要がある。

３　次期のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稲の出穂は、全国的におおむね平年並みとなっていることから、次期のもみ数確定期調査は例年どおり９月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】

水稲の作柄に関する委員会委員

（座長）染　　英　昭　財団法人中央果実生産出荷安定基金協会副理事長
秋　田　重　誠　公立大学法人滋賀県立大学名誉教授
黒　田　栄　喜　国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授
近　藤　始　彦　独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲収量性研究チーム長
長谷川　利　拡　独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域主任研究員
丸　山　幸　夫　国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授
山　岸　順　子　国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場准教授
渡　辺　典　昭　気象庁地球環境・海洋部気候情報課予報官
馬　場　利　彦　全国農業協同組合中央会農業対策部長
米　本　博　一　全国農業協同組合連合会常務理事
安　藤　　勲　全国米穀販売事業共済協同組合常務理事